

新編水滸畫傳

三編

貳

875
22



門 875
號 875
卷 22

神書佛書醫書國史
繪本平介新古賣買
手遊いろく法存の間
河内文了と上

依後町三休指所入

河内屋孫之備

新編水滸画傳卷之貳拾貳

東武

高井蘭山翁

譯編

明治三十四年
十月十日
講求

○其下

武松は兄が家の内居一既に六日と居りたる武松一疋の段子以
河嫂に送りたれど彼妻これとて怒り笑と含んで云るハ叔々公
あつて送りや物と為す時とありて互て云れりん。よかに姑これ
と更收ぬとも限なく候なり武松ハ武大郎夫婦と一雨小生て
毎日縣裡小頃候一我ハ穢と勅りありひはやくあり。ある時ハ疾
病。その時刻さふ定らざる。河嫂少も勞と稱する候も
ねんころに飲食と具へて武松をありたれ。武松ハ中おこれと安
うずおひひる。河嫂時武松ハ公と親ひし。系族ハのん

小て少しも効する系及なり。先法若のどく。一月竹りとさしなる
 時、新まゝに十一月のそまふなりて、連日、風緊く、形雲に下ふ
 遍く布。又一天、終く揚くとして、大者、降り、世界、於て、銀、頭、敷る
 てくならず。翌日、武松、子、朝、り、縣、裡、み、系、り、て、直、ら、に、日、中、に、勢、り、ん、ど、も
 未、だ、飯、さ、り、し、る。武、大、師、心、中、に、待、候、居、り、ぬ。小、徒、妻、武、大、師、と、責
 て、高、責、に、出、し、ら、れ、武、大、師、已、と、を、治、す、し、て、當、の、為、に、街、を、出、り、り、り。
 以、時、彼、妻、間、壁、の、上、に、坐、り、酒、肉、の、飲、を、買、酒、(今日、は、巴、不、得、武
 松、に、三、盃、と、効、め、て、情、を、教、ん、ぬ、と、。虚、善、地、小、娘、び、乃、ち、簾、の、下、に
 坐、て、武、松、が、圓、と、係、着、以、び、日、武、松、の、意、の、裏、と、さ、り、て、亂、瓊、碎、玉、と
 踏、て、ゆ、り、し、る。河、嫂、簾、を、掲、げ、て、縣、裡、も、を、冷、つ、つ、ん、ふ、い、ん、ど、圓、り
 送、り、し、や、武、松、が、い、り、今日、は、縣、裡、を、早、飯、と、食、し、又、朋、友、小、酒、を

効、れ、し、も、何、と、て、使、く、は、え、ら、る、も、坐、に、坐、を、起、し、ゆ、り、之、河、嫂
 が、云、ぬ、且、よ、し、く、向、火、を、武、松、に、と、謝、し、て、爐、火、の、辺、り、に、坐、
 り、れ、バ、河、嫂、自、ら、希、後、の、門、を、実、て、酒、肴、を、携、へ、武、松、が、希、に、來、り、武
 松、到、官、て、云、我、兄、の、何、方、に、行、な、ひ、て、未、だ、海、さ、り、や、河、嫂、が、云、我、夫
 の、毎、日、街、に、出、て、商、賣、を、當、り、し、る、と、我、且、叔、と、三、盃、を、酌、ん
 武、松、が、い、も、く、兄、の、圓、り、と、ゆ、て、昔、に、的、の、久、河、嫂、を、扱、め、て、托、し
 り、し、る、い、ん、ど、よ、く、丈、が、圓、と、係、ん、や、子、速、酒、を、盪、て、自、ら、杯、に、滿、
 刺、れ、と、武、松、に、送、り、笑、と、會、情、を、露、し、て、云、る、ハ、叔、く、以、盃、の、酒
 と、飲、ま、武、松、が、云、嫂、く、必、だ、懇、懇、の、こ、と、を、や、あ、ふ、さ、と、刺、さ、盃
 の、酒、を、乾、し、ら、れ、ど、河、嫂、又、は、く、と、篩、で、武、松、に、再、び、効、り、り、
 武、松、に、を、謝、し、し、唯、賭、亂、に、飲、乾、し、又、以、盃、に、酒、を、篩、で

河嫂小送り。別態懇に勧められ。河嫂これと弄んで竹乾一邊
 武松に同て云る。我亦日人の傳へ云と皆を叙くハ縣希に一人
 の妻を養ひ置ぬふと。未だ云はれし事實なりや。武松が云。嫂く必
 外人の云と。まゆあてられ。来原来色を好む事にあはれ。何ぞ奇
 に妻せり。むごや。河嫂が云。叙くの言ハ。君子小似され。只恐くハ
 心と意。手は。武松が云。嫂く。これと。佐ト。おん。我兄小
 更河嫂が云。叙くの兄何ぞ。うか。の。教事と。初らんや。あ。是
 のこと。曉さ。い。ん。ぞ。保高賣と。致えんや。叙く。且。心と。寛げ。酒と。破
 更。一。連に。三。口。盃と。篩で。武松に。勧め。已も。又。二。三。盃。飲。一。ふ。
 愈。春。心。発。勃。自。これ。と。思。び。も。只。願。戲。れ。云。と。ゆ。て。武松と。相
 ぶ。武松。え。と。七。八。か。推。際。只。既。と。低。て。自。慚。愧。に。堪。ざ。り。り。

河嫂又酒と盃と盛て来。んと。已に。炉火の。辺。と。ま。られ。武松ハ。只。火
 筋と。拵。て。火と。弄。一。心。大。に。悦。ば。す。河嫂。折。て。又。酒と。携。へ。て。武
 松が。前。来。り。乃。ち。右。の。も。と。伸。し。て。武松が。肩。脾。と。推。て。云。る。ハ。
 叙く。只。這。些。衣。被。と。着。一。ぬ。の。も。て。ハ。何。ぞ。比。多。氣。に。堪。あ。らん。や。
 武松。これ。と。て。詭。伎。う。づ。び。只。既。と。低。口。と。笑。く。尚。更。火。筋。と。拵
 て。飛。し。河嫂ハ。武松が。着。へ。さ。る。と。見。て。忽。ち。火。筋。と。棄。ひ。去。て。云。る。ハ。
 叙く。火と。弄。一。何。の。戲。と。あ。一。ぬ。の。も。と。一。向。笑。と。合。で。媚。ふ。り。
 武松ハ。此。光。景。見。て。大。に。怒。り。られ。只。怒。と。出。さ。げ。一。を。在。ら。ん。ハ。
 かの。河嫂。欲。ん。倍。熾。ん。と。て。武松が。心。中。怒。を。も。ち。乃。盃。に
 酒。を。篩。で。これ。と。一。口。二。口。飲。り。折。又。六。分の。酒。と。割。し。て。武松。小
 送り。叙。く。け。酒。と。飲。む。武松。此。時。忽。然。と。大。に。怒。河嫂



潘金蓮春心
 發して武松
 と悪

が持つる酒を奪れて地上に歩控控を勤めて云々。嫂く何ぞ
 かくのどとさ。羞慥と慥ざること。やうなや。我ハ是乃と知り義と
 ちり大夫夫之被風俗と知り人備と没する徒とハ等しう。嫂く
 まうてかく恥をさして云々。我云と容れして尚戯れせり
 ぬ。我従ひこれと忍ぶとも。我がけ拳ハ骨と。嫂くと饒すま。唯宜く
 自、恥と知支河嫂これ笑て忽ち面及紅して。急に盃を收て云々
 ハ我ハ是一時の戯にこそ妙云々。小何ぞ是とまよ。ぬや。實に拙に
 人の心底うると。一向武松とそ怒り。び時とや。未の刻もさりし。ぶ
 武大郎も已に高堂と完了て立ゆり。乃ち門と敲きられ。妻此く
 門と開て武大郎と逢ふ。武大郎是と驚り。友眼に涙と含て。教
 及すべと知らし。武大郎これと怪て問る。ハ汝何ゆゑに教に怒

ねつ笑わりのや。まが云我夫を忍ぶるゆゑ。人と叫入。我と欺しめあり。ぬ
 武大郎云。唯う来て汝と欺き。ぞ妻が云。我今日武松と名と
 踏でゆると見えて。心中に憐れ。自ら酒食と具へて管待する。武松
 人さした糸とて。只顧我。小個戯ぬ。是ゆゑに。我是と憤ま。武大郎
 かく我對ハ系來かくのどと不義と做者。小わ。必も声とさる。わて
 隣家の窓に笑ま。うと。あれと。あち小武松が房裡に入て。乃ち
 武松小對して云々。ハ汝ハ食と吃し。乃ち。我汝と共ハ酒食と用入
 小房裡と出て。外面にまれ。武松是と笑し。くも。一声とも。着は
 唯黙然とて。居たり。乃ち。忽ち身を奮起して。門外小馳出。ぬ。
 武大郎却とさる。て。再三。留り。れ。武松更に耳も入。混一縣裏
 と。帯て。走り。行。ぬ。武大郎。初。妻。小。問。て。云。乃。武松。只。願。縣。裏。と

辱んで馳行は是れ何の意ぞや。我ハ悔ひこれと憂う。妻罵つて云彼が
 とき禽獸何ぞ憂とする人。被今縣裡不往ハ自ら恥てこそ避行
 らめ。被必定已が行季と運び搬て。縣裡小移る。とめく。是をい
 惡魔と出に乃理すれ。却て慌て。我う支り。被と一雨に居く
 思ひなり。よく我に一紙の休書と与へ。我別は家と出で。是れは
 て被を呼入。武大郎これとびて。毎ひ一云も。是を。只心中に
 憂へり。初る。知に武松一人の難と引て。毎ひ立海り。我行季亦收
 捨て。難云小挑せ。又忙しく。縣裡と居て。走り。武大郎これと
 見て。早く。趕行乃ち武松と對して云。汝ハ何の意。子縣裡ハ移
 行。武松云。去見必は。是と官。み。と。され。是。是。時ハ大に家
 つ。汚もの。只我不任せ。携し。め。武大郎是と。び。て。毎ひ。官。小

こととをさ。遂に私宅。向り。り。は。時。彼。妻。ハ。於。喃。々。内。々。と。武。松。を
 罵り。汝。は。不。義。の。徒。久。く。我。家。に。在。遂。に。我。命。も。害。す。と。わ。ん
 汝。今。縣。裏。に。移。り。行。是。天。の。保。佑。之。汝。今。於。此。の。職。と。ま。る。久。く
 づ。び。て。必。ぞ。保。つ。と。わ。ん。と。混。一。怒。罵。じ。云。武。大。郎。は。醉。と。ん。て。慌。い
 只。顧。武。松。が。事。と。思。ひ。乃。ち。武。松。ハ。目。より。又。知。縣。相。公。の。衙。門。裏。小
 移。り。て。毎。日。急。ぐ。ば。公。役。と。勤。り。被。妻。再。と。武。大。郎。に。示。し。て。云。る
 武。松。ハ。是。人。と。して。鳥。小。ぶ。も。さ。ら。ぬ。必。渠。と。務。ひ。や。と。さ。る。れ。若。一。度
 ぶ。て。も。彼。と。弟。ひ。ゆ。ひ。な。ば。我。子。遂。丈。姻。の。縁。と。断。て。離。別。被。す。也。武
 大。郎。元。來。惡。毒。の。志。ま。れ。ば。今。妻。に。赫。さ。れて。考。て。武。松。と。務。ひ。さ。る。と。指
 され。尚。縣。の。相。公。ハ。任。じ。別。て。より。以。來。已。小。二。年。殆。り。に。な。り。多。く。金
 銀。銭。字。と。蓄。り。る。が。私。に。東。系。の。親。類。の。方。へ。送。け。ち。ん。と。思。く。も。等。宗

のまに命じて東京へ送らば必ず途中に盗賊の獲わらんぞとあれ何
 卒ま人の豪傑を求めば是を監押して杖室と東京へ送りせんと
 尋らるぬに。勿ら武松がとと考ひ申し申中にて候。即日武松を
 商儀して云らば。我道日東京の親類へ一荷の礼物を送らんと思ふに
 途中に許さるれば。汝に此の豪傑を監押して候。乃ち中へ送らるん
 汝り辛若と辞せ。我乃に東京に往む。我又辛く恩賞と仍ん。我
 松が云。余多く相公の大恩を蒙る。何を致して辛若と辞するとあらんや。
 余未だ東京へ行はば。東京の風流も一見致し。思ふ折。前
 かんべも苟に致さぬ。乃ち礼物今く。個ひま。利の自。發。致す。せ。
 知縣を乞て。大いお。候。ひ。利。合。せ。ひ。て。且。武。松。を。賞。し。り。乃。扱。武。松。に。
 知縣の命と受て。廳上を退き。乃ち二人の雜を。街小。馳。て。活。着。を。個。

一。ぬ。壺。に。家。石。街。に。来。り。武。大。郎。が。家。小。参。り。以。時。武。大。郎。も。已。に。候。せ。
 賣。完。了。了。て。日。く。家。小。参。り。武。松。に。對。面。し。ぬ。武。松。は。女。人。の。雜。を。以。命。じて
 活。着。と。具。へ。一。む。被。阿。嫂。に。度。武。松。を。怨。め。り。れ。も。余。情。未。だ。殺。を
 居。り。し。武。松。が。参。り。と。見。て。申。中。に。怒。ひ。り。乃。被。又。今。こ。に。致。し。申。候。
 め。て。我。が。事。致。思。ひ。出。して。こそ。考。へ。ぬ。我。且。慢。くと。被。と。考。へ。し。と。私。に
 悦。で。亦。復。風。流。小。頼。ひ。意。に。門。前。小。出。て。武。松。を。迎。て。云。ら。ば。叔。父。の。机
 邊。て。考。候。不。通。ふ。い。や。ぬ。ぞ。我。考。に。心。不。然。り。ぬ。も。是。頃。日。の。叔。父。と。我
 家。小。邀。へん。と。こそ。思。ひ。一。今日。何。の。事。に。我。ら。夫婦。と。強。ひ。申。ひ。し。と。
 武。松。が。云。我。今。急。事。あり。て。夫婦。の。人。に。若。知。せ。り。ん。為。特。に。何。候。と。遂
 ぬ。阿。嫂。が。云。已。に。かく。の。で。く。ん。樓。に。宅。つ。て。候。り。ぬ。と。武。大。郎。と。共。に。武
 松。と。引。て。樓。に。上。り。三人。已。に。坐。定。り。り。れ。被。雜。を。活。着。と。具。へ。樓。の上。小

携へ来る。武松於て盃を飲りて。武大郎と河嫂小劬む。河嫂は只顧小武松を
 看て情を通せんと思ひしを武松早くし解を察すれ。文に怒もせぬ。
 又悦もせぬ。只武大郎を勸め酒を酌しめ。盃數巡に到りし。武松又大盃
 を出し酒を飲くと篩をこして。武大郎小對して云々。只武松に
 知縣相公の命に依て東京に上るんと。明日、急に發せし。這は時
 二三月早く。八日又十日の内に飯を食し。この由に我特く来て。武松小一
 言と告んと。武松は只武松一人と有り。懦弱なる由。我り。南地小在。只武松は
 外人小欺れぬ。又外人と云ふ。酒を酌す。毎日。門を突て。是非
 おく。悔り。又外人と云ふ。酒を酌す。毎日。門を突て。是非
 口舌小免れぬ。又外人と云ふ。酒を酌す。毎日。門を突て。是非
 へ。我。悔り。又外人と云ふ。酒を酌す。毎日。門を突て。是非

とんと思ひ。武松は只武松一人と有り。懦弱なる由。我り。南地小在。只武松は
 て。即ち盃を飲りて。武松は只武松一人と有り。懦弱なる由。我り。南地小在。只武松は
 云小從。とんと。遂に。酒を飲乾り。武松又再び。盃小注ぐ
 と篩て。河嫂小對して云々。武松は只武松一人と有り。懦弱なる由。我り。南地小在。只武松は
 と用て。示し。中。に。及ぶ。武松は只武松一人と有り。懦弱なる由。我り。南地小在。只武松は
 され。今。河嫂の。情。を。察。す。れ。武松は只武松一人と有り。懦弱なる由。我り。南地小在。只武松は
 考て。憂ひ。ぬ。武松は只武松一人と有り。懦弱なる由。我り。南地小在。只武松は
 て。あり。那。河嫂。を。看。て。怒。り。武松は只武松一人と有り。懦弱なる由。我り。南地小在。只武松は
 て。云々。武松は只武松一人と有り。懦弱なる由。我り。南地小在。只武松は
 の。男。人。見。ぬ。武松は只武松一人と有り。懦弱なる由。我り。南地小在。只武松は
 て。より。武松は只武松一人と有り。懦弱なる由。我り。南地小在。只武松は

めは是明に我を憐るの洞之遠根胡乳する云ハ代人不對しと云
 更我うて新のとき套伴と笑しうるときは海島事を成松は
 と笑て呵々とお笑て云るる。若嫂々の宣ふ云のてくハ我ハ兄才おも憂
 ることあるは。唯字くは心とお教し。又今嫂くの言我く心に記し
 ぬ。孫を云に差ふるん。惣の爲にけ。酒と飲ぬとて。彼大盛に飾持する
 酒と阿嫂に送りられ。阿嫂盛を推察て。壺に樓より様子半に
 て声と放ち酒を流し。云るハ。汝ハこれ聰明伶俐の人されば。若嫂と致ふ
 こい系来知りつらん。何ぞかくのてく。吾乳と云るや。我向に武大郎に嫁
 せし時。弟を叔とわくことと笑に。頃日汝我が家に来て。を多く事を惹
 出に。是乃理小放て何ぞや。幸ひて我家の事も取も管ふと云れと大
 に哭て様子とぞ下りり。武大郎。武松ハ。於樓の上にもて。幾く酒と

勃め。盛已に收りられむ。武松。武大郎に別れと告て。樓よりし。ふ。
 武大郎ハ。頻に。武松。小對し。て云るハ。汝必はよく聞。我
 心と安んぢ。めよとて。笑に。支眼小涙と酒さりり。武松。は。醉やん
 心中に思ひ。も。若見必は。憂ふべし。我。又。よく。聞。明日より。高
 賣に出る。び。と。唯。胡。夕。心。と。安。し。懷。と。寛。げ。布。に。居。る。毎。日。の。佳
 用。我。自。ら。送。る。也。武。大。郎。於。依。り。て。門。前。を。送。り。か。一。向。別。れ。て
 歎。き。り。武。松。又。云。若。見。必。我。云。し。と。と。忘。れ。ぬ。か。と。云。れ。故。て。又。再
 い。對。面。致。さん。と。二。人。の。離。れ。と。傳。へ。縣。裡。へ。ぞ。ゆ。り。る。翌。日。武。松。ハ
 已に。旅。装。を。御。へ。知。縣。相。公。小。見。え。し。知。縣。も。一。輛。の。車。に
 貨。物。と。載。ふ。人。の。精。を。并。に。支。人。家。僕。と。武。松。小。從。を。め。り。れ。む。
 武。松。薄。下。知。縣。と。辞。し。於。て。又。人。遂。に。陽。谷。縣。と。離。れ。て。東。京。へ。ぞ

又武大所ハ武松に別れてより。毎日妻に罵らん。
 氣と思ひ怒と吞と争ひなげ。心の内に只武松が言を守。
 高貴も考より早く完了て。教に回り。便ち彼簾をたて。最後の門
 と笑し。唯安くと。寂坐して。休出するても。うんられ。妻は。指子や。着
 心大小焦燥て。武大郎が面を指さ。罵て云ら。汝悪夫何ぞかくの
 事と。暁さるや。日色。於半天の裡に。わら。い。や。門と。笑す。い。世。る。の
 法。小わ。ら。む。必定。人。皆。我家。を。笑。て。い。よ。く。汝。と。悪。り。と。す。だ。汝。を。聴
 明。る。と。い。ふ。も。何。ぞ。我。と。忍。れ。て。かく。の。工。に。い。や。武。大。が。云。え。世
 界。の。人。我家。を。笑。む。唯。よ。く。笑。ま。ら。べ。我。が。武。松。が。云。い。と。初。て。皆
 是非。を。免。す。この。金。を。我。い。ん。そ。れ。と。容。ひ。ざ。らん。や。妻。是。を。咬。て
 武。大。を。白眼。罵。つ。て。云。ら。い。汝。懦弱。なり。と。い。ふ。も。同。く。是。男。子。に。何。ぞ

自ら。い。ま。え。と。る。さ。び。して。人。の。下。知。と。交。り。武。大。が。云。我。交。して。武。松。が
 云。と。ち。ん。と。彼。が。云。一。我。為。る。皆。金。玉。の。何。之。汝。必。ぞ。我。の。云。と。い。ふ
 と。う。れ。喜。れ。と。咬。て。益。怒。と。合。一。連。小。十。竹。日。只。願。夫。と。罵。り。も。武
 大。郎。は。是。と。耳。も。穿。入。ぞ。毎日。只。晏。く。出。て。い。お。く。海。り。彼。亦。後。の。門。と
 緊。く。笑。して。武。松。が。云。と。ち。ん。と。彼。妻。初。の。間。の。毎日。武。大。と。罵。り
 う。も。子。後。罵。り。疲。れて。自ら。釋。り。約。莫。武。大。が。回。る。時。分。に。い。れ。ば。妻。は。ん
 自。ら。彼。簾。を。除。て。門。と。笑。む。武。大。郎。を。見。て。暗。に。悦。び。たり。已。に。又。六
 日。経。る。程。に。冬。も。漸。く。暮。ん。と。して。天。氣。陽。小。回。り。日。色。愈。々。暖。之。尚
 日。彼。妻。武。大。郎。も。初。て。回。る。時。分。と。思。ひ。自。ら。門。前。に。立。出。て。簾
 と。取。ん。じ。る。程。に。武。大。郎。の。外。に。一。人。の。漢。子。立。り。る。が。事。正。に。出。来。せ
 へ。さ。時。刻。刻。り。る。や。彼。妻。が。女。に。持。た。る。簾。思。は。れ。る。内。より。滑。落。て。

権興
大凶
改を
西門慶
介して
簾と
れん
とん



尺貫商問尺辨

行編大奇置博卷之三



精
糲
東
西
東
饒
高

正
六十日
相
相
貴

ラマコニ番サシテクレトイキヤツイニイル

新編大奇置博卷之三

此禁強うん西門慶も又歩笑て云るは彼は實に彼が妻なるを云ふ
 云彼は是箇魔大王が妹也又道冥官が女武大官が妻之彼と同なり
 何故ぞや西門慶が云汝又戲と云や實に彼女がとて若知せよ王婆が
 云大官人何ぞ彼と知ぬらや彼が夫は毎日縣赤小能徊して餅を
 賣漢子之西門慶が云我是と猜せり彼女の必宜棗糕と賣徐三が妻
 ちうせ王婆これと笑もと揺て云るは彼が夫の徐三をばかへお意
 られた彼が夫は尚徐三よりも醜く大友人あびこれと猜し又西門慶が
 云銀擔子李二が妻うん王婆取と揺て云若李二をば是城に好一
 對の夫婦之西門慶が云依らば必は花朧膊陸小乙が妻なり王婆
 大に笑て云陸小乙の彼が夫なり又はお後の夫婦之大友人
 あびんとあて猜し又西門慶が云我實に猜しごとし知れ何人

の妻なるや汝速に若知せよ王婆哈々と歩笑ひ云るは我官の
 渠が夫の名と云て大友人笑しん言人の是餅と賣武大郎之西
 門慶これと笑て是をせめて放て大に笑ひ云るは武大郎と云へ人
 三寸釘谷樹皮と譚名と附る武大郎がとらばや王婆が云汝は
 手矮漢之西門慶大に歎息しと云るは彼のては美女いんど武大
 郎とて醜男に嫁しるや王婆が云古より後にも駿馬却て燕漢と
 言て走る妻女に拙夫と伴て眠と云とあり世間小使かこの配
 合多し西門慶笑ふと良久しふくと再び王婆小指して云るは汝が
 兒子は誰小睡つて何處に往らるや王婆が云我兒子は數年ぶあ一
 人の高窓に跟く外に出らるぞ其後久しと著修不通なるゆゑ死
 生も知らるなり西門慶が云汝何ぞ兒子と唱回しと我に跟らるや

我格別小情と掛く候ふへきに近日好使わつて必也出寄と云く
 昭回せ王婆が云ふ大友人見子と播磨のりふ。是莫大のあひこ
 近く幸後と索て呼よと。西門慶が云見子回らば子速我小
 知せよとて遂不店とて出たり。王婆の又茶を煮て密も来るんと
 候るぬに約莫一時余りて彼西門慶又来て王婆が店の簾の下
 小坐して武大郎が門前を覗く見る。王婆は時一椀の梅湯と持け
 西門慶小飲しむぬ門慶えと飲早て云る。王婆がは梅湯の做
 け味実英之汝がぬに尚敬むの梅湯もや。若作りわづは我れ
 られと取すし。王婆故を夢得りて神と云る。我一生媒とせ
 られどもまだ余の英女わぬぬわづぬぬに懸すべし。西門慶が云我の
 是梅湯のいととを問るに汝の却てえと媒と云る大いに差つり。

王婆お笑へ云梅と媒と云本同韻なり。我の只媒と做と問ふも
 夢得ぬ西門慶が云汝果しと媒と云我為に能く之と媒と做あ
 へ。我まう汝と謝すし。王婆が云媒と云る。我素より老在りわづ
 天下小双びる媒ともる。わづぬぬと大友人の夫人これを知りぬ。
 我は靨臉の皮と刺申す。わづぬぬ。時ふる門慶が云我妻の原耳賢女
 と括て能人と申す。既小今幾むの妻と求めて我身辺に傳せられ
 在。賢婦と云ふ。今一人もなり。若我がぬに汝英なるや東西小看
 著ま。子速我小若知せよ。王婆が云我前日一人の英女と云る。わづ
 怒る。大友人のこころ小合ふ。容顔の思考する。わづぬぬ。唯
 怒る。はま年かう。花期の首も逢り。西門慶が云ま年僅の
 差わる。果して汝が云。上品なり。何為ま年と後せんや。王婆が云

那女、戊寅の生れも今年九十三歳なる門慶大いに嘆て云。汝
這狂婆子いんぞびのてん戯れまよひやもて。已小坐とて門外
馳出たり。以時天色漸暮りれど王波の列火と點下りて門を笑んとし
る如に彼を門慶又また簾の下に坐せし。乃ち武天郎が門前と向
座りられ。王波が云。大友人和合湯と申ひおらんや。門慶いも。是
む好らん。汝もく拿來れ。王波すまも。一盞の和合湯と申へ吃せし。
や久しと坐し。遂に又簾の下とて王波小對して云。乃ち我れ
明日來也。とて去。我れ私宅小海り。翌日子天小王波の門と扉を
外面とるに彼を門慶又門前にて一向奔る。王波の申に忠
ひる。いひ。西門慶いんぞびのてん心忙し。我れ少汁と施し
彼が錢杖と申り。おんもめとほんで乃ち坐し。茶と煮んとし。

乃ち如小ぬ門慶も王波が店に來て簾の下に坐せし。只顧れど
傾けて。武天郎が門前と親む。王波のそれと云。ぬ餅にり。は。只風炉
と揃て茶と煮し。居るが。門慶乃ち店の内と申んで。乃ち云。乃ち王
波の我がぬ茶と拿來らんや。王波は。討お笑て云。乃ち大友人は。連日
迎へ見え。おさう。乃ち今日何くの氣が吹て。我が店におり。向や。宜し
肉をへて茶と申ひ。乃ち乃ち濃くと薑茶と煮して。西門慶小と云。
乃ち門慶茶と吃して。乃ち。戯れて云。乃ち我れ去年の暮。は。店に
より。心氣。治ふ。び。迎に。來り。乃ち。汝。宜し。我れ。相伴。し。茶と吃せんや。
王波が云。我れ。お。伴。致さん。却て。與。乃ち。只。独。自。吃し。乃ち。門
慶又。問て。云。ひ。回。望。の。武天郎。は。乃ち。何。と。申。業。と。す。乃ち。王波が。云。
實人。何。ぞ。ふ。く。是。と。忘。れ。ぬ。乃ち。彼。は。毎。日。條。と。高。よ。て。色。活。と。ぬ。門

慶が云、我小我も彼が買小餅ハ名物の巻をこよと喰ひて。我今彼小
 可て。只又十の條と抛へんと欲は。ちりし武大郎庵に生へさや。王婆が云
 大友人彼が條と買んと思ひなり。彼少刻街に出る賣を待て買入
 何ぞ必しも親自彼が家に行りあさとわらんや。門慶が云、汝が云
 ち後刻街に於て喰ふへしとて遂に店を立て出られ。王婆の尚
 簾の迎ふ立て彼を門慶と云らん。一向交ちあつたを窺ひ居んで。
 一遭ハ西へ往。又一遭ハ東に尋り往。其に己に七八遍して尋ひま
 王婆が條坊にへり坐せり。王婆又戯れて云、るハ大友人數月
 此辺にた消息もあつり。今日ハ難かに來條とあさる。門
 慶もてきて大に喰ひ乃ち懐中の一兩和の許の銀採出。王婆の小
 ちへ云、るハ汝控へこれと收めて條坊とせし。王婆が云、條坊は多
 行ま。いんぞめてこれと收んや。云、汝必ず多せと備せし。かく。
 且宜く是と收ふ。王婆暗小存候して思ふ。彼は者も收れの端と
 尋しぬ。我慢く是と釣んと尋り。乃銀と收りて云、るハ。大友人、頃
 日ハ中、小一つの事ありて。まど火急なり。及見えぬ云、汝何と收てこれ
 と猜し。らや。王婆が云、流も門と入とさ榮枯のこと。官とと保よ。
 容顔と親よして便ち得と云とあり。況や我數十年昔怨のことと
 經由多。縦ひつれ。和の蹠蹠と云り。只一猜にこれと差し。ひりては。西門
 慶は時我實に心中一つの事あり。汝はこれの根本と猜せんや。王婆の歩
 笑てこれと猜せん。豈疑らんや。只一猜これと着て見せり。さん。
 耳で例として夢をくとも。乃ち此ハ。い。い。慢を。び。して云、るハ。大友
 人ハ。日。歩。に。は。辺。に。徘徊。し。ぬ。ハ。必。定。希。日。大。友。人。の。取。中。と。お。

行ま。いんぞめてこれと收んや。云、汝必ず多せと備せし。かく。
 且宜く是と收ふ。王婆暗小存候して思ふ。彼は者も收れの端と
 尋しぬ。我慢く是と釣んと尋り。乃銀と收りて云、るハ。大友人、頃
 日ハ中、小一つの事ありて。まど火急なり。及見えぬ云、汝何と收てこれ
 と猜し。らや。王婆が云、流も門と入とさ榮枯のこと。官とと保よ。
 容顔と親よして便ち得と云とあり。況や我數十年昔怨のことと
 經由多。縦ひつれ。和の蹠蹠と云り。只一猜にこれと差し。ひりては。西門
 慶は時我實に心中一つの事あり。汝はこれの根本と猜せんや。王婆の歩
 笑てこれと猜せん。豈疑らんや。只一猜これと着て見せり。さん。
 耳で例として夢をくとも。乃ち此ハ。い。い。慢を。び。して云、るハ。大友
 人ハ。日。歩。に。は。辺。に。徘徊。し。ぬ。ハ。必。定。希。日。大。友。人。の。取。中。と。お。



王婆貪心密奸の媒
と成

尺帛踏看問正錯

新編大新書傳卷之三十二

邪うは隔壁の那人と慕ひあふに決定せり。我以猜いん。西門慶
 ねと笑。大ひに悦で云る。汝はに智ハ階何小賽機ハ陸賈小強れ
 我実に彼日。隔壁の人に。不意。陰中とおれ。遂に那人と見初て
 うり。必来。魂魄自く蕩くして。春路に悲ひ。文に足と入。ご如也。
 汝肯て我為に。一つの計を施さんや。王婆笑て云。我多年茶と賣と
 之を。今日の。活とする。足は。是れに申。這等の。と。拏観て。こ
 活の助と。何ぞ。大友人の命に。遵ごらんや。西門慶云。汝りい
 く。け事と成統あさ。わ。我汝に。十兩の銀と。与へ。汝が。死ん時の棺
 椁と。買し。らん。王婆云。這等の。と。と。握光と。て。光と。握小
 五の。件と。ぬて。す。は。握光と。云。二字ハ。を。難し。然れ。た。この。又。件と。た
 今。ふ。す。は。こ。さん。ハ。丸。易し。ま。第一ハ。潘安。晋の。潘。が。容貌。第二ハ。貨と。措

び。第三ハ。鄧通。が。富。第。四ハ。衣の。裏に。針。ひ。て。身と。刺。して。若。と
 ぬ。ぶ。第五ハ。毎日。多く。雨。暇。あ。ん。と。要。は。この。又。の。件。り。果。して
 全。う。ば。は。事。拏。観。て。七。又。は。五。の。件。一。つ。も。缺。る。と。あ。ら。う。成。統。極
 め。て。強。う。ん。寧。素。乾。淨。に。体。多。西。門。慶。云。我。實。に。は。五。の。件。渾
 て。克。す。べ。し。第一。我。容貌。只。潘。安。小。こ。を。如。す。も。也。將。就。う。て。十。か
 醜。い。の。ま。す。第二。我。家。に。有。る。の。資。宝。助。ふ。強。して。行。ふ。各。は。し。
 第三。我。蓄。鄧。通。小。及。び。在。使用。と。欠。べ。う。も。第四。我。む。う。思
 の。一。字。と。も。有。る。縦。ひ。は。身。と。割。り。とも。敢。て。動。ず。る。と。わ。り。じ。第五。我
 極。め。て。雨。暇。あり。り。強。う。ず。ん。ば。い。ん。ど。徒。再。之。の。以。迎。ふ。事。を
 と。始。ん。汝。只。寫。す。我。が。為。に。神。妙。の。計。を。盡。し。これ。と。成。統。さ。う。め
 一。強。う。我。を。く。汝。と。謝。す。べ。し。王。婆。云。大。友。人。は。五。件。皆。全。し

このさへも我知。只一ツのごと。早ま安貼やすま。西門慶が云。汝も
 ねと。只一ツのごと。安貼ま。あ。何等の事や。ぞ。王婆が云。我
 今分明に。これぞ。さん。天友人。寧く。さ。凡。以。推。先。と。云。ハ。甚。難
 こと。と。十分。に。先。と。推。と。さん。事。必ず。成。就。せん。然。れ。も。十分。に。先
 と。推。と。欲。する。こと。さん。其。費。九。分。九。釐。に。至。て。僅。そ。一。釐。と。云。と。云
 とも。又。成。就。し。ご。と。と。め。り。友。人。系。本。懐。吝。を。顧。り。て。安。り。に。銀。と
 俵。と。と。怖。れ。ぬ。ん。我。今。安。貼。ま。と。云。一。の。只。一。事。と。大。友。人
 果。し。て。これ。と。い。ん。る。門。慶。が。云。是。を。易。と。と。汝。何。と。以。て。難。と。と
 と。す。や。若。金。銀。と。俵。と。と。あ。わ。ら。ぬ。金。と。汝。が。調。度。小。任。す。べ。し。當。れ
 と。懐。む。と。め。ん。王。婆。が。云。大。友。人。の。果。し。て。け。の。と。く。ん。が。我。且
 一。ツ。の。計。め。り。あ。ら。れ。と。け。の。と。さん。大。友。人。勿。ち。那。人。と。一。片。に。於。て。對

面。竹。ふ。で。只。知。の。大。友。人。肯。て。我。小。從。ひ。あ。べ。さ。や。西。門。慶。が。云。
 此。事。の。に。於。て。我。好。惡。と。棟。を。以。て。汝。に。從。ふ。べ。し。汝。も。け。の。計。め。り。や。王。婆。亦。笑。て。云。今。日。の。已。に。晚。ぬ。且。其。宅。に。飯。を。ひ。て。
 半。年。或。ひ。ハ。三。々。月。と。さ。し。て。再。び。あ。り。ぬ。其。時。官。々。高。儀。す。べ。し。
 西。門。慶。と。呼。び。て。忙。々。と。地。上。に。跪。て。云。乃。ハ。王。婆。老。菩。薩。何。ゆ。え
 初。も。云。慈。悲。の。と。と。云。ぬ。や。那。く。ハ。我。悲。ひ。と。と。救。ひ。ぬ。王。婆。が。云。と
 呼。び。て。呵。々。と。笑。ひ。大。友。人。叔。く。慌。あ。し。と。念。響。く。忍。の。一。字。と
 ち。り。又。我。此。計。ハ。是。第。一。の。上。策。と。只。武。成。王。の。廟。小。へ。ん。と。こ。を
 終。ふ。ま。す。と。端。的。に。孫。武。が。女。兵。に。教。し。計。十。さ。び。提。へ。て。九。と。ひ
 著。る。よ。う。も。強。れ。り。我。今。日。大。友。人。に。從。て。は。せ。り。ぞ。那。人。ハ。系。是
 清河。縣。の。大。友。人。と。出。る。上。品。の。衣。別。と。と。針。線。と。云。ん。大。友。人。今

一疋の白綾一疋の藍紬一疋の白絹并に十疋の系綿を調へ我小使
 多之強ふ我彼が家にて往て那人に對して云へさハ我幸ひに一人の
 施至りて一套の壽衣の衣料と賜ぬ我れ其未だ終らぬ由近々終
 せんといふ所へ夫人我為に曆本を定て其乃吉日と擇出りま
 り。我ハ急に裁縫を央ふにされと終しめんと終らば。此時那
 人嘔吐して睡みて。脱ぎ着る及わらば仕事別休む人なり
 万一小我女が為小縫へさし必ず裁縫と。確ひありてまらぬとい
 別是先あり。其時我彼人を我家に請て縫しめんと終らば。我
 家こそ縫へさし。壽衣と這首へ持系せよと云ふ。仕事別休む人
 彼人若治候ハ別我家に來つて縫じと云ふ。後ち是二分の禿あり被
 り。孫我家の來て縫へさし。時ハ必酒肉を役けて欺待。第一日ハ大友人必ず

某りありてまらぬ第一日小我女我對して汝の家ハ不自中を事候はば宜し
 我家に持係て縫しめんと云ふ。仕事乃ち休む被り次の日ハ。我家小使
 縫ハ乃ち是三分の禿あり。昨日も又大友人來りありてまらぬ。第三
 の日ハ年の刻最後ハ大友人每もも格別に新めて我店に來りて
 別嘆歎の聲と仰てお尋とす。此時大友人ハ門扉に立往て云ふ
 へ。この頃日ハ世事に纏れて此辺も來らざり。愈王波の恙なきやと
 仰りて。此時に我走り出て大友人と逢へ別延て。房裡に入中て。其彼人
 大友人の目入ありと見て。急に己が家に逃回らば。我又是と尋んて
 終らば。乃ちは仕事候ち息あり。彼ハ大友人の入りありと見て。其
 て。其身を勤す。其乃ち是此分の禿あり。大友人己に坐し。其
 白。我又彼人小對して云へさハ。這官人ハ別是我に壽衣と賜ひぬ。

施主の儀に希ふの善人なると多く大友人の好むと吹嘘すべし。
 大友人は又彼女が針線に精熟なり彼等共と低て一玄の善人も
 及ずんば事別ち休む方一彼言と聞て是善なりとわらば乃ち
 是又分の光あり我は時又大友人小對して云へば夫人一片の善
 意と云て我はに手とりしてびと逢ふに我は存念と云ふこれ
 いろいろ傍侍も又忠に友人の施主とせしむ一人は銀と出し一人は力
 と出しおん就中ば夫人の手に経すひぬる壽衣と云ふ冥途に趣ふ
 必ずそ功德ふよめて極楽浄土の法佛法菩薩等々途中小出て迎へん
 何の疑わらわんや我夫人と款待す縁しめ恩と謝せんと恩も報償く
 力のこれ及ぶるまでなく大友人我小對つて東人となりぬ宜しく夫人と款待
 してびあがれ以上の厚恩齒と渡りてこれと云ふと云て涙く頼りし

時に大友人朱提と我に与へ酒食と求めしめ又破人なりは船と見て
 忙しく船と記て回るとわらふ我又是と杜住せしむんは事乃ち休む
 乃渠は光系と見ても船身と動すとらんば乃ち是六分の光あり我は
 かの朱提と云て門と出んとする時別破人に對して云へば我は是酒
 食と求めて来ん小友人宜しく友人に陪して後話し又と大抵に
 挨拶して出べし。猶人れと云てのり身と記して己が家に避往ば
 是又支り難く人さる。此事後ち休む被る窄くを離すして
 是善に及ぶ。是七分の光あり我已に酒食と具て搬び出ん時又破人
 小對して云へば夫人且生活と收拾ありて一盃酌又難にば友
 人我小對して東道となりぬぬ。夫人必ず辭しぬよと云ふと懇懇
 小詞と云すべしは時破人若に辭し別と告て回るとわらふは事別

休む彼りいふ辭一同人と云ふ文に手と動すと云ふべし乃ち
八分の光あり。彼己に大友人と我と對して酒と酌與遂に圍に
ん時我故酒をそととて再び大友人に酒と沽しめん我亦
て云ふべし酒をそととて一向求め来れと命し之に於て我酒
と賞ふ所辭ふりてなり。忽ち其後の門と冥すべし大友人彼と
友人房裡に居る時かの人より大に焦燥て跑ゆると云ふ刻は
体や彼り我にねせてつと冥をせしめ焦燥と云ふべし乃ち
九分の光あり。己ふ九分の酒をべし唯餘の一分の光却て大に強し大
友人彼人と共に房裡のうちに居る時只より多く情の詞を以て
彼が心と柔げぬ人必む忙しき御と勤しと事と得りぬと云ふ
若大友人思の一字と忘れぬひて自ら汁と放りぬと云ふべし我亦して

け對手襖と休べし。大友人彼と云ふ酒卓に傍し酒と酌ぬと云ふ
作て彼一對の筋と衣の袖とて拂ひ為しぬ。故急慌忙し。これ
と捨る所辭ふりては且もと伸してか人の脚に凝りぬは時彼り
開しめぬ我又來て冥す。ぬれをば手ぬすまされぬは
便ち止む我彼脚とも纏る声も做すべし乃ち十分の光と彼り
か多くんべいんどうけい小豆んや即ちけいと名て握光とす。十分の光と
握し云のまをけい上のてい大友人の心小豆ん。唯ちけいけいけい西門
慶一。計の次第とて天小豆ん此小豆んを以て云ふる。王波の汝が胸中
六万巻の書と蔵りや。かくのいれ神妙奇特の計。陳平張良の
いんどうけい及んぬ我為小豆ん遠く力を及せ。王波が云我亦保
上の心と安んじぬ大友人と約しぬ。十支の銀と云ふべし

其見けい 西門慶が云 汝必ずこれと憂ひ慮るこそあらん未だぞ知れけ計ハ何れの
 吉日とトして行ふべきや 王波あが云 幸希今日ハ貴た吉日なれば
 せりべし 我が武大郎がいまこ圓らざるに急して急に彼が家に行は
 く洞と云し 彼人と我が家に行は 倚んとて 調へ申さん 大友人の
 彼白綾木の衣料と求めて来り 西門慶が云 汝が計せり
 是殊更慌を 我が少停衣料と調へ申さん 是れに街へ
 是れ事の控輿と廣らるるて 竟お多くの人小苦難と云の 四人の命と断
 次巻より退く要し

新編水滸画傳卷之貳拾貳畢

